アルピタン語の社会言語学的実態
―　消滅の危機にさらされている、あまり知られていない ロマンス語の一つ　―

This article aims to give some enlightment about one of the least known Romance languages spoken in the Gallo-Roman area, Arpitan, nowadays almostcompletely absorbed by the French language, and formerly called Francoprovençal. It used to be considered as a French or an Occitan dialect until the end of the nineteenth century, but was since recognised as an entirely separate Romancelanguage(Ascoli, 1877). This paper briefly recalls the long process of replacement of the native Arpitan language by French through centuries and more recent decades in the regions where Arpitan used to be widely spoken, that is to say in the regions situated at the borders between France, Switzerland and Italy. The author will also summarise the current situation of the language and its speakers mainly in the French administrative region of Rhône-Alpes as it is from there that he originates.

１．　はじめに：アルピタン語とは

アルピタン語とは、昔フランコプロヴァンス語と呼ばれていた言語の今日の名称である。それにもかかわらず旧名は現在でも多くの研究者に使われている。「アルピタン」とはアルプス（山脈）と同じ起源を持つ arp-という語源から作られた名称である。「アルピタン」という名称が選ばれた理由はその言語が歴史上話されていた地域の大部分が主にアルプス山脈とジュラ山脈の地域だからである。だが、山脈地域ではない（アルピタン語域の西部にあるリヨンとブレス地方などの）アルピタン語話者にとっては受け入れにくい呼び名かもしれない。

「アルピタン語」が名称として採用されてきたのは、「フランコプロヴァンス語」という名称が言語学者ではない人や言語学者自身にさえも引き起こしやすい誤解を避けるためである。つまり、事実に反して、フランコプロヴァンス語はフランス語とプロヴァンス語（もしくはオック語 [1]）の交差により生じたものにすぎないと思われる傾向にあったからである。１９６９年にはすでに一度その名称が改められたのであるが（それまではハイフンつきの「フランコ・プロヴァンス語」（franco-provençal）からハイフンなしにされた）、ハイフンの削除はその誤解を避けるには不十分だと分かり、その言語の復興の支援者が新たに名づけたのである。Decour (1966 :1）はリュグデゥノ・ロ

マン語（lugduno-romand）とも呼ぶ（リュグデゥノとはリヨンのラテン語の名である Lugdunum のことであり、ロマンとはスイスのフランス語圏である Romandie という地域のことである）。

アルピタン語は１９世紀末までオック語の影響を受けたフランス語の方言として扱われていて、アルピタン語の諸方言にフランス語の他の方言から区別できる特別な名称を持っていなかったようであるが、イタリアの言語学者であるアスコリ（Ascoli）が 1877 年に初めて次のようにこの新しい言語地域を定義したのである。「フランコプロヴァンス語とは別の特徴の他に、一方でフランス語、他方でプロヴァンス語と部分的に共通するいくつかの独特な特徴を持つ言語型である。その言語型は多様な言語的な要素の交差により生じたものではなく、逆にその歴史上の独立を証明するものである。だが、その要素は他のネオ･ラテン系の言語等を特徴づける言語的な要素とはあまり異なっていない。」[2]

本論では上記のようにあらゆる誤解を避けるためにアルピタン語という名称を採用することにする。

２．　標準化されていない言語

アルピタン語の特徴の一つは一国の標準語となった他のロマンス諸語（フランス語、イタリア語、スペイン語など）と違い、単一で標準化された言語として存在するのではないことである。Decour（同書：１）はこう指摘する：「この言語学的な実体はその周りに位置するロマンス諸語、つまりフランス語、プロヴァンス語、イタリア語　（これらの言語も様々な方言の合成である）と比べてこそ現実性を持つのである」。アルピタン語は言語的かつ地理的な連続体を形成する諸方言の一群であり、西はフォレー地方から東はイタリアのヴァッレ・ダオスタ州まで、北はジュラ山脈から南はドフィネー地方まで広がっている。これらの方言は最近までは標準化もしくは統一化の対象になったことはないが、1998 年には言語学者の Stich が初めてアルピタン語の諸方言を対象とした　ORA (orthographe de référence A)　に続いて ORB (orthographe de référence B)　という方言統一記述方法を作成した。Stich（1998：7）　によると、フランコプロヴァンス語は（統一化と標準化の段階に移らずに）「完璧な方言形態の段階で止まっている」。Abalain（2007）はアルピタン語の方言を下記の群に分けている：リヨネー方言、フリブール方言、ヴァレー方言、ドフィネ―方言、サヴォア方言、ブレス方言、フォレー方言、ビュジェ―方言とヴァッレ・ダオスタ方言。だが、ピエモンテ方言と南イタリアのファエト方言はこのリストに入れていない。これらの方言も皆様々な

下位方言群からできている。いずれにしても、どの方言にも地理による（村や集落でも）多様性が見られる。狭い地方であるビュジェでも文法形態と語彙の面で大きな相違点が見られる[3]。

だが、厳密に語形論の観地から見て、FORA 報告書[4]はこう言い切っている：「方言」（フランス語でいうと dialecte）という単語はフランコプロヴァンス語地域内における厳密な言語域を定義するには不適切である。なぜなら、フランコプロヴァンス語地域内には定めた地域に対応すると思われる画一的かつ重大な展開が見られないからである」。したがって、アルピタン語を諸方言に分類することは科学的に満足できるものは何もない。その言葉通り、北部方言と南部方言の区別基準も、西部方言と東部方言の区別基準も適切ではない（FORA：19）だけでなく、アルピタン語の様々な方言に対して現在使われる名称（例：リヨン方言、サヴォア方言、フォレー方言など）も「言語学的というより地理学的かつ歴史的な基準によるものである」。要するに、アルピタン語の言語学的な特徴は主に方言の極端な細分化であると言える。

３．　消滅の危機にさらされている言語

Stich（同書：7）は次のように報告する：「この言語はあまり盛んではない。フランスとフランス語圏のスイスで話される方言と同じように、特に農村で第二次世界大戦前に生まれた世代の人々によって話されている。２０世紀初めごろは都市でも驚くほど生き生きしていたのに、義務教育制度、農村の過疎化、現代生活様式の激変を正面から受けてしまった。この言語は言語的な地位規定や国家や方言や文化などの面では統一もなく、観光地から離れた地方でしか継承されていない。サヴォア地方とヴァレー地方の近くにある谷で話されるこれらの方言を少しでも重視しているのはイタリア共和国とヴァッレ・ダオスタのみである」。

FORA 報告書（2009：39）はローヌ・アルプス地方におけるアルピタン語（オック語とともに）の話者の人数を次のようにみつもっている。「大都市で暮らしている人口を考慮に入れ、かなり大きな誤差を見て多くてもローヌ・アルプス地方の人口のほぼ１％（つまり６万人ぐらい）がアルピタン語もしくはオック語が話せると推定される」。ヴァル・ダオスタにおける Fondation Chanoux[5]によるアンケートによれば、2001 年にはアルピタン語を「知っている」と申告するヴァッレ・ダオスタ人の人数が 67.35 %で、アルピタン語を理解できる人数は 61.89 %であり、話せる人数は 45.27 %である。また、Ethnologue のウェブサイト[6]によると、スイスにおける話者数は 1998 年に約 7000 人にすぎなかった。Bodlore-Penlaez（2011）はアルピタニア全

域にわたり、1998 年におけるアルピタン語話者の人数を 14 万人と見積もっている。その大部分はヴァッレ・ダオスタに移住している。また、Ethnologue のウェブサイトによると、フランス、スイスとイタリアにおけるアルピタン語の話者数は、全部で約 147 000 人である。

Decour（前掲：2）はビュジェ―南部に位置するベタン村民による方言の段階的な衰退をこう描写する。「（ベタン村民は）皆、一人も残すことなく、ビュジェ―方言の変種であるベタン方言を話していた。しかし 1836 年にベタン村がベタン市（それまではベタン村はサン・デ二・アン・ビュジェ村に属していた）となり、それに伴う学校の設立とともに、教育が大きく進歩した結果、村民はフランス語を知ることになったが、それは母語としてではなく、第二言語としてであり、市街に行ったときもしくは村外の人々としか使っていなかったのである。だが、20 世紀が始まる数年前からは小学校教員の指示に従い、親は子供に方言で話すことをやめるようになった。その結果、子供は方言を理解していながら、話さなくなったのである。従って方言は最終的に消滅して行ったのである。現在はすでにこの段階に達している」。次に Decour は他の地方からベタン市と境を接するアンベリゥ・アン・ビュジェ市の貨物操車場に働きにやってきた労働者や、就職のために都市へ出ていく村の若者、村の人口に影響を与えた相次ぐ世界大戦について以下の様に述べている。「こういう状況では 19 世紀生まれの農民のみが方言を話せたわけである。しかしその話者の人数は時間とともに徐々に減っていった。1950 年になると、男女を問わずに、方言話者数が多くても 30 人くらいであった。1955 年には、約 20 人、1960 年には、12 人となっていた。あと数年経てばベタン方言はもう完全に忘れられているはずである」。また、Decour（1975）は 1975 年になると方言話者は二人しか残っていないと報告している。現在はどうなっているか想像がつくであろう。

『ヴァルロメー方言』（2001：124）にはその方言の消滅プロセスについて次のような証言がある。「ジョールジュが小学校に通うことになったので、母は休みの間だけ、つまりクリスマス、イースター、夏休みに、我々の家に連れてきてたのだ。我々の村では、お年寄りも家でお年寄りの世話をする若者も皆方言が話せた。例えば、シャルロットは二人の娘に、タルマはジャンヌに方言で話していた。学校では教員が方言を使うことを厳禁していたので、方言は女性のドレスや髪があっという間に短くなったと同じようにかなり早くなくなっていった。方言はＴＳＦ（ラジオ）が到着するとすぐになくなっていった。クリスタルセットもラジオ受信機も方言で話していたわけではない。都市からやってきたジョールジュは大人の話を理解するにも、す

べて知るには、注意深く耳を傾けないわけにはいかなかった。そしてある日、彼は方言を話せるようになったんだ！５歳の時には言語から言語へと移れたので、お年寄りはこの少年のおかげで方言の回復が少しでもできたことがうれしかった。」[7]。

これらの二つのストーリーは世界中でよく見られる言語消滅のプロセスを証明ている。その地域の地方都市（リヨン、グルノーブルなど）における早期のバイリンガリズムだけではなく、国政の活発な教育対策による町村などへのバイリンガリズムの浸透プロセスも表している。アルピタン語とフランス語によるバイリンガリズムは歴史的に証明されている。アルピタン語の諸方言の話者でありながら教養豊かな階層から出た者の中には、自分の著作を通じてフランス語の威光に貢献した有名人も比較的多い。例えば、フランス語史で一番早く執筆された文法書の一つである『フランス語についての考察』　(1647) を書いた Vaugelas を例にあげることができる。Vaugelas は Meximieux で生まれ、Pérouges の男爵であったが、当時はその地域はフランス王国ではなく、数世紀前から独立していたサヴォア公国の領土であった。Vaugelas 自身が自分はサヴォア人だと主張していたといわれている。また、17 世紀のフランス語をまとめた *Dictionnaire de Trévoux*（『トレヴの辞典』）も 1704 年に出版されたのはドンブ公国である。ドンブ公国は 16 世紀から 18 世紀までフランス王国から独立していた。フランス王国から独立していたこれらの公国の上流階級でフランス語が盛んになった一因はサヴォア公国の支配者が 1614 年からフランス語を公用語にしたからであるが、国民はフランス語を話せなかったのでアルピタン語の様々な方言を日常的に使っていた。だが、フランス語は最終的に義務教育の普及と経済的な人口移動のおかげで、先ず上流階級（宗教のエリートを含める）に、そして町人や商人を通し、段々農民にまで浸透したのである。

４．　フランスにおけるアルピタン語の方言の実態

言語消滅の現象は全くまれなことでもなく、最近のことでもない。その現象は古代時代でも考察されている　(例: ヒッタイト語、シュメール語など)。現在日常的に使われる言語は約 6000 と見積もられているが、Jones（2001 : 1）　はその半分くらいが２１世紀末までになくなっているだろうと予測する。Hill (1978 : 69) によると、ここ 500 年の間に地球上で話されていた言語の半分くらいがすでになくなっている。

Bauman (1980) は以下の様に言語消滅の実態を特徴づけている。

(i)　成人話者において、話者の数が減少傾向にある

(ii)　家庭で子供に言語を教えていない

(iii)　話者数がきわめて急速に減少している

(iv)　話者全員がバイリンガルで、基本的に全ての状況において他の支配言語が使われている

(v)　（消滅に瀕している言語は）融通が利かなく、新しい状況に適応できない

(vi)　（消滅に瀕している言語は）文字として表記されていない

(i)から(iv)までの上記の基準はフランスにおけるアルピタン語の実態を適切に特徴づけると言いきれるが、アルピタン語の方言がまだ盛んに使われているヴァッレ・ダオスタには部分的にしか当てはまらないと思われる。(v)についてはフランス語からの借用語が柔軟でないという欠点を大きく緩和するのみならず、アルピタン語の方言自体がそれらの外来語をアルピタン語化もできることが明らかである。プレミリヤウとヴァルルメの方言にはこういう例が比較的多い。Jones が記すとおりに、外来語の導入はフランス語や英語のような言語の場合には活力の印しであるが、消滅の危機にさらされているアルピタン語のような言語の場合には「廃用の印し」なのである。

（vi）　については、消滅の危機にさらされている言語も文学的な伝統を持つ言語であることは周知の事実である。ケルト語においても、アルピタン語においても文学的な作品や行政的な記録がある程度は見られる [8]。だが、その言語的な遺産はあまり知られていないのである。また、1998 年には Stich によって作成された方言統一記述方法があること自体が基準(vi)を否定する。

一応、アルピタン語とその方言の言語実態は国だけではなく、地方にもより異なっている。フランスとスイスよりイタリアの方でアルピタン語の方言が盛んに話されているが、フランスのアルピタン語の諸方言の中では、サヴォア方言とブレス方言が一番盛んに話されているとされている。Campbell & Muntzel（1989：182-6）は言語消滅に関する 4 つのシナリオの可能性をこうあげる。

（i）　Sudden death（急な消滅）：当該言語の最後の話者が殺戮か自然死で皆なくなってしまったということである。

（ii）　Radical death（根本的な消滅）：抑圧的な行為もしくは大量虐殺の結果、話者は自衛のために自分の言語を断念し、その言語を急速に使わなくなる。

（iii）Gradual death （段階的な消滅）：ある言語が他の言語と接し、コミュニケーションエリアから除かれるほど他の言語に支配される

場合。このようなシナリオは典型的に国語併用状態に導かれ、一応一番若い話者は方言に最も自信がなく、高齢の話者はもっとも方言を上手に使え、その間では方言の使用に関して様々なレベルを持つ話者がいる。

（iv） Bottom-to-top death（ボトム・トゥ・トップ消滅）：当該言語はすでに一番親密で日常的なコミュニケーション・エリアでは失われていて、逆に祭式かつ政治的な場面で相変わらず使われている場合。

基準の(iii)はアルピタン語の方言の段階的消滅のプロセスに適切に当てはまるといえるのではないかと思われる。フランスとスイスの場合はフランス語が支配言語の役割を持つ(スイスの地方行政区によりドイツ語もその役割を持つ)が、ヴァッレ・ダオスタではアルピタン語がイタリア共和国の法律に比較的守られているにもかかわらず、イタリア語が段々強くなってきて圧力を与えている。最終的には、もしアルピタン語の様々な方言が完全になくなることになれば、それらの地方における地名と支配言語に与えた影響のみアルピタン語の基層の跡として残るだろう。

５．　地方言語に対するフランス人の社会言語的態度

社会政治的な受け入れは全国か地域レベルでのアルピタン語もしくはその諸方言の教育に対する問題を提起する。教育制度が消滅の危機におかれた言語の復興の成功には大きな役割を果たす。一方、その受け入れはフランス人の日常生活における当該言語の現実的な使用に対する問題も提起する。

地方言語に対するフランス人の社会言語的な態度に影響を与える歴史上の事実を思い出そう。FORA 報告書（前掲: 6） はフランス王国により新しい領土が征服されるにつれ、「エリートはとてもすばやくフランス語を採用するが、国民は相変わらず伝統的（地方的）な言語を使用する」と語る。1539 年にはヴィレル・コトレ（Villers-Cotterêts）の王令により「従臣による言語的な習慣を規制せずに」、フランス語が王国の行政的言語となる。それで、Racine (Lodge, 1993 : 194） は 1661 年にリヨンを通った際に、市内でさえ言葉がわからないと訴え、さらにその実態は南のオクシタニアのヴァランス市の方へ進むと段々悪くなっていったと記す。そしてフランス語の規定的文法書が盛んとなった 18 世紀には、アカデミー・フランセーズをまねた地方アカデミーがフランス各地で出現し、その目的は各地方でフランス語の使用を推進することであった。その結果、地方のエリートは顕著にフランス語化される。フランス革命に伴った恐怖政治となり、言語対策が一変した結果、

最も極端な革命家によって地方言語などが「社会的な立ち遅れや無知を招く担い手」（Barère, 1794）とされることになり、フランス語は国民全員に押し付けられる。同じ頃 Grégoire 神父は『方言を滅ぼしフランス語を広く普及させる手段と必要性について』[9]を執筆した。当時の全国人口が 2600 万人と見積もれば、地方では全くフランス語ができないフランス人の数は 600 万人に、フランス語であまり上手に会話ができない人数は 600 万人に、フランス語が書けなくても話せる人数は 300 万人に及ぶと Grégoire は見積もる（Lodge, 1993:199）。FORA が述べるとおりに、地方言語に敵対する政策が相次ぎ、それらの言語を消滅させるのは教育制度の役割となった。初めて地方言語やフランスの海外県の諸言語[10]の選択教育が許可されたのは 1951 年の Deixonne 法においてである。1970 年からはバカロレア試験にも選択科目として選べることになっている。但し、そのリストにはアルピタン語が載っていない。その結果、バカロレアにも選択科目として選べないだけではなく、アルピタン語の教員の採用試験もないというわけである。

Wardhaugh は 1987 年に方言話者の人数を見積もることを試み、オック語は 200 万人、ブルターニュ語は 40 万人、フランドル語は１０万人以下、コルシカ語は２０万人以下、カタルニア語は数人、バスク語は消滅しそうであるとしている。アルザス人はバイリンガルであるに違いないと言い加える。だが、アルピタン語話者については一言もないのである。

1992 年には欧州評議会がヨーロッパ地方言語・少数言語憲章を採用したのに対し、フランスの国会は憲法第二条において「国語はフランス語である」と書き記したが、2008 年にはフランス憲法 75−1 条が地方言語をフランス共和国の言語遺産として認めたのである。しかし、フランスの教育省はアルピタン語の存在を認識しているものの、Deixonne 法において定義された地方言語の中にアルピタン語をいまだに入れていない。

６．フランスにおける地方言語の国立教育制度とアルピタン語

フランス人は現在地方言語に対して無関心なわけではない。フィガロ紙（2011）の記事によると、2001-2002 年度[11]には 252.858 人の生徒が地方言語の授業を受けたが、2008 年度[12]には 404.351 人に増加したようである。この記事では学校で一番勉強されている地方言語がアルザス語（35.855 人）であると記されている。第二位はオック語（24.392 人）である。そして第三位はコルシカ語（9260 人）、その次はブルターニュ語（7324 人）、バスク語（3209 人）、カタルニア語（2723 人）などである。もちろん、アルピタン語については情報が載っていない。フランスの教育制度に認められなくても、実

は、アルピタン語のサヴォア方言がサヴォアの数か所の小学校や中学校や高等学校で教えられている。2007-2008 学年にはほぼ 250 人の生徒がその授業を受けていたようである（FORA : 79）。サヴォア方言の教員協会はバカロレアの選択科目としてアルピタン語のサヴォア方言の試験の主催をフランスの教育省に認めてもらおうとしているが [13]、現在のところ成功していない。また、この例でわかるのはバカロレアの選択科目として認めてもらおうとするのは標準語としてのアルピタン語というより、その方言の一つだけであろう。ある明確に特定できる共同体によって話されている言語としてのアルピタン語が無いので、フランス教育省にとってはサヴォア方言でも他の地方言語と同じように教育制度に導入することは認めにくいのかもしれない。だが、ブルターニュ語の例を見れば、学校で教えられる標準語が実際に話される方言と異なるので、まだ標準化されていない（だが、方言統一記述方法はある）アルピタン語でもバカロレアの選択科目にしてもいいのではないかと思う。さらにアルピタン語の話者数の少なさも公教育制度に導入することを困難にするのであろうか。

また、アルピタン語の方言を教えること自体は様々な実際的かつ制度的な問題を提起するのである。Jones（前掲 ： 86） はこう指摘する。「方言を教えることは教員が方言をあまり話せない、または、文字に記述されていない場合、どうやって記述すればいいか分からないという問題が起こる可能性がある。[...] 資料不足は（たとえ資料が今後見つかるとしても）教員が積極的に諸方言を教えることや諸方言を教えるための教材作成を困難にする」。アルピタン語復興計画の際にも立ち向かうべき困難の一つはその復興計画に必要な根本的な資料の欠如である。FORA（前掲:11）は次のように結論付けられる。「言語学習は言語学アトラスや辞典などによるのではなく、効果的な継承を許す適切なコーパスもしくは話者による実使用なのである」。

７．ローヌ・アルプス地方におけるアルピタン語話者のプロフィール

言語復興計画を実行する前に伝統的に当該言語が話されていた地域における言語使用の実態を評価するアンケートを行う必要がある。FORA 報告書は地方言語の話者に関する社会プロフィル（年齢、性別、職業、住所など）、言語歴、方言使用率と方言知識レベル、自分の話す方言をどういう風に名づけるか、方言再生に対する話者の希望などについて現代化された詳細な情報を与えている。FORA（前掲: 28）が明らかにしたのは回答者の中にはアンケートにためらいを込めて答える人がいるということである。その原因は「恥ずかしいと自分が思う言語を知っていることを自ら知らせたくないという

話者の恥、さらに気まずさ」である。その結果、もともと提供された 1500 枚のアンケートの回答用紙のうち、約 1000 枚回収できたと申告する(2009 : 28)。そのうえ、FORA はアンケート調査の弱点をこう認める。「調査結果からは有意義な量的データが得られたが、それだけではローヌ・アルプス地方における言語実態に関する誠実な描写はできないであろう」。だからローヌ・アルプス地方における地方言語の活発性とその話者の人数とプロフィールを評価するために、ローヌ・アルプス地方の各地で方言話者をターゲットにした面接調査も行われた。FORA による一番意義深い調査結果は下記の通りにまとめられる(その結果はアルピタン語もオック語も含められたもので、アルピタン語だけに関する結果ではないことに注意)。

(i) 地方方言を流暢に話せる人の割合は年齢とともに増える。70 歳以上の年齢層は 44%、50 歳以上の年齢層は 11.1%、30 歳以下の年齢層は 2%のみで、30 歳から 50 歳までの年齢層は 0%のようである。30 歳以下の年齢層には話者がわずかいるのに対し上の年齢層にはいないことは、60〜70 年代に若者をターゲットにしたかなり活発な方言伝達運動を促した活動家のアクションがあったことが調査書で説明されている。だが、その結果は個人に特有なイメージによるものなので、当てにならないのかもしれないと FORA は指摘する。また、「話せる」の意味は話者次第の評価によるものなので、その結果を相対化するべきであろう。

(ii) 地方言語を理解できる人の割合にも同じ傾向が見られる。70 歳以上の年齢層は 92.9%、50 歳から 70 歳までの年齢層は 40.2%、30 歳以下の年齢層は 4%、30 歳から 50 歳までの年齢層は 9.5%である。FORA の調査者は「理解する」の意味が回答者により違うので、その結果を相対化するべきだと注意する。また、地方によっては、フランス語により似た地方言語の方言もあるので、地方言語話者ではない人にとっても解りやすいという現象も見られるため、他の方言に対しては理解がないのかもしれない。

FORA 報告書には下記の情報も載っている。

(i) 地方言語がうまくできると申告する話者の 2%は毎日、5.8%は良く使うとも申告する。その大部分は高齢者であるとわかった。

(ii) 回答者の 6.3%は小学校に入学したときにすでに地方言語が話せたと言い切る。つまり、地方言語がその回答者の母国語もしくはフランス語とともに共母語であったことを示す。

(iii) 地方言語が流暢に話せると申告する回答者の中では 25.7%が学校内か協会内で地方言語を学んだと言う。その中では 40 歳から 60 歳までの年齢層に属する者が圧倒的に多い。つまり、その話者は 50 年代から 70 年代

まで地方言語の授業を受けたわけである。そして、その話者は家庭環境で地方言語を母語として話した話者に接触していたであろう。その話者の大部分はサヴォア地方にいることが分かった。

地方言語の話者のプロフィールの中では高齢になり地方言語の話者となった場合もある。その大部分は子供のころ地方言語が話される環境で育ったのに、社会に出てから地方言語を習得した人であると分かった。そのような話者は自分の地方言語スキルを軽んじる傾向にあっても地方言語に対してはポジティヴなイメージを持っているようである。FORA はゴースト話者の存在も指摘する。そのような話者は地方言語が話せるのに、地方言語使用に対する学校で受けたいじめや罰の記憶を持ち、その能力を隠す人の場合である。最後に受動的な話者もいる。そのような話者は全くもしくは十分に話せないが、理解はできる者の場合である。その大部分は地方言語ができると言い切る話者の子供の世代に対応するとわかった。受動的な話者は長い間地方言語を聞いていないので話せても自分の地方言語能力をしばしば軽んじる傾向にある。

結局地方言語を母語とする話者の大部分は高齢者で近年少数になっているとわかった。実は大部分の話者は、親子間継承プロセスが終わった随分後の年齢に習得していて、地方言語が母語ではないこともわかった。FORA に報告されている通り、この二つの話者のカテゴリーはすでに子供を産む世代ではないので、親子間継承プロセスは全く中止されたわけである。さらに、積極的な話者より受動的な話者の方が多いということが明らかである。また、地方言語能力に対する自己過小評価と軽視はローヌ・アルプス地方における地方言語の話者数自体が過小評価されることを招くであろう。それは逆にその人数を過大評価することも招くと考えられる。その結果、アルピタン語話者の人数を評価することは非常に困難なものとなるであろう。

その上、地方言語スキルの基準も問題になる。要するに、地方言語話者の合計に受動的な話者を含むべきか否かという問題がある。FORA（前掲: 49）は「言語復興計画は現実的かつ完全な総括に基づかなければならないが、地方言語を話すか理解する人の人数評価はローヌ・アルプ地方におけるアルピタン語とオック語の実態を描写するには不十分なので、他の要素を考慮に入れるべきである」と結論付ける。そして、潜在的話者も含むことを勧める（同書: 50）。「潜在的な話者は地方言語が話せるのに、話す機会がない話者である。こういった話者は消滅危機の言語のコンテクストには少なくはないと考えられる。一応、他に地方言語の話者がいても、普通地方言語を使うのは一定の話者だけである。さらに、年齢とともに、話者が段々なくなっていく上、

なかなか地方言語による新たな関係を結べないので、衰退のプロセスがスタートし、維持されていくのである。こういう条件では地方言語使用率は、話者数だけによる評価から推測するよりも低いであろう」。

また、言語復興計画が成功するには地方言語使用の社会コンテクストも考慮に入れる必要がある。FORA によると、地方言語使用の主な環境は家族内で、同世代間より異世代間の方であるとわかった。だが、その異世代間の地方言語使用はもっとも年取った世代間のことであり、最も若い世代は家族内でもフランス語を使う。さらに、地方言語使用のコンテクストは友情関係によるもので、限られており、日常的なペースにあるわけではない。その結果、地方言語を使用できる新しい知り合いを作ることがさらに難しくなるわけである。だが、楽観的に言えば、地方言語話者の人数は地方言語を話す機会よりももっと多いはずである。

８．終わりに

フランスではアルピタン語の諸方言で自然に発言する会話がまれになっており、親子間継承プロセスも停止したということは否定できない事実である。その結果、アルピタン語の諸方言はすべて消滅の危機にさらされている。だが、FORA（前掲: 26）が述べている通り、「ローヌ・アルプス地方で話されて、どこか相似たところがあるアルピタン語とオック語は、この領域がラテン化されてから 60 もの世代にわたって話者により相次いで形成された。両方とも他の言語より地方の味や色を最も適切に言い表せる言語である。それで両方とも重大な地方的遺産を成している。また各言語が世界を表現し、考えを表す独自の方法を持っているので、両方とも人間遺産である。欧州評議会がヨーロッパの地方・少数言語に対して要求する通り、また UNESCO が世界中の消滅危機にさらされている言語に対して要求する通り、我々にはそれらの言語を保護する義務も、知らせる義務も、その使用を促進する義務もある」。また「現在の言語実態からこれから数年もしくは数十年後の将来におけるローヌ･アルプ地方の方言の活発性を予測することは大胆なものとなるのであろう。実は、現在の話者のスキルは将来の話者のスキルとマッチしない。言語復活運動は衰退プロセスに歯止めをかけるものとなるのであろう」（同書 : 89）。その上、教育施設による需要も有れば、言語資源も有るのである。但し、地方言語話者と新地方言語話者を積極的に動員するのでなければ、国政機関と地方言語非話者による地方言語に対する好意だけでは地方言語の将来を変えるには不十分であろう。なぜなら消滅の危機にさらされているアルピタン語の将来は、外からの要素がそのとてつもない作業を助け

るとしても、先ずその地方言語話者自身の努力にかかっているからである。

注

[1]原則として、「プロヴァンス語」とはプロヴァンス地方に限るオック語を示すが、オクシタニア域全体で話される言語を示すこともある。

[2] « Chiamo franco-provenzale un tipo idiomatico, il quale insieme riunisce, con alcuni suoi caratteri specifici, più altri caratteri, che parte son comuni al francese, parte lo sono al provenzale, e non proviene già da una tarda confluenza di elementi diversi, ma bensì attesta la sua propria indipendenza istorica, non guari dissimile da quella per cui fra di loro si distinguono gli altri principali tipi neo-latini. »

[3] 数キロしか離れていないプレミィリユ市とヴァルロメー地方の方言でもこのような相違が見つかる。だが、その相違は相互コミュニケーションを損なわないと思われる。

[4] FORA 白書（Francoprovençal et occitan en Rhône-Alpes 『ローヌ・アルプス地方におけるフランコプロヴァンス語とオック語』） はリヨンのカトリック大学のピエル・ガルデット研究所などにより、ローヌ・アルプス地方において局地言語の実態を発表する報告書であり、言語的遺産の保護対策も述べられている。2009 年発行。
http://www.univ-catholyon.fr/information-sur/fac-ecoles-instituts/lettres-et-langues/rapport-fora-51902.kjsp?RH=1188919604365 （アクセス：2012/03/01）

[5] Cavalli, M. (2005). *Education bilingue et plurilinguisme – le cas du Val d'Aoste*. Didier

[6] http://www.ethnologue.com/show_language.asp?code=frp
(アクセス：2012/11/22)

[7] « Vorrè que Georges allâvè a l'écôla maternelle, sa mârè nè l'âmènâvè ple què pè lè vacancè: Noyé, Pâquè, è l'îté. D'guè chô quartîllè, tuî lo viaou (è lo d'zon-no qu'évon dè viaou a la mail'zon) parlâvon enco patoué, k'mè la Charlotte avoué sé duè feuille, la Thelma avoué la Jeanne… è a l'écôla, lo mètro évon tellamè défédou dè parlâ dince, què chô patouè sè pardévè ass' vîto què lè rôbè è lo pail' dè fèn'nè sè son raccourcî ; ass'vîto què la T.S.F. évè ar'vâ: lo pôsto a galène, poué lo pôsto a késse dè bouè avoué cadran nè parlâvon pâ patouè. Le Georges què v'névè dè la veul'la [Lyon] évè obl'zîllè d'écoutâ pè comprîndrè ç' qu'é d'zévon lè grandè parseun'nè si vollévè to savail'. Jousqu'ou d'zor ou s'è mettâ a parlâ patoué: a cin'qu'an, ou passâvè dè na lingua a l'âtra, è lo viaou évon bien contè dè vîl'lè qu'è n'évè pâ to pard'zou avoué chô d'zon'no »

[8] Tuaillon, G. (2001). *La littérature francoprovençale avant 1700* 『1700 年までのフランコプロヴァンス語での文学』. Grenoble : Ellug

[9] « *Sur la nécessité et les moyens d'anéantir les patois et d'universaliser l'usage de la langue française* »

[10] Deixonne 法ではバスク語、カタルニア語、ブルターニュ語とオック語に限られ、1974 年にはコルシカ語、1981 年にはタヒチ語、1992 年にはアイジエ語、ネンゴネ語、パイシ語とドレフ語、1986 年にはガロ語、フランシ

ック語とアルザス語が加わった。

[11] *L'enseignement des langues régionales en question*『地方言語教育の問題』http://www.lefigaro.fr/actualite-france/2011/10/31/01016-20111031ARTFIG00605-l-enseignement-des-langues-regionales-en-question.php（アクセス:2011/10/31）

[12] *L'enseignement des langues régionales a bien progressé*『地方言語の教育が大いに進歩した』http://www.lefigaro.fr/actualite-france/2008/05/27/01016-20080527ARTFIG00011-l-enseignement-des-langues-regionales-a-bien-progresse.php（アクセス：2012/01/19）

[13] *Pour ou contre l'arpitan au bac*『バカロレアにはアルピタン語の試験はどう？』http://www.arpitania.eu/index.php?option=com_content&view=article&id=99:patoisbac&catid=3:newsflash（アクセス：2012/01/19）

参考文献

Abalain, H. (2007). *Le français et les langues historiques de la France*. France：Editions Jean-Paul Gisserot

Ascoli, G. I. (1877). Schizzi franco-provenzali. *Archivio glottologico italiano* 2, 61–120

Bauman, J.A. (1980). *A guide to issues in Indian language retention*. Washington, D.C.：Center for Applied Linguistics

Bentahila, A., Davies, E. (1993). Language revival：restoration or transformation？*Journal of multilingual and multicultural development 14/5*, 355-73

Birt, P. (1985). *Lé jèrriais pour tous. A complete course on the Jersey language*. Jersey: Don Balleine

Bodlore-Penlaez, M. (2011). *Atlas of stateless Nations in Europe*. Wales: Y Lolfa

Campbell, L., Muntzel, M.C. (1989). The structural consequences of language death. In N.C. Dorian (ed.), *Investigating obsolescence*. Cambridge：Cambridge University Press, 181-96

Cavalli, M. (2005). *Education bilingue et plurilinguisme* – Le cas du Val d'Aoste. Didier：Paris

Decour, A. (1966). *Le patois de Bettant*. Mantes et Bettant：France

Decour, A. (1975). *Vocabulaire du patois de Bettant*. Bettant：France

Dressler, W.U. (1981). Language shift and language death – a protean challenge for the linguist. *Folia linguistica 15*, 5-28

Dorian, N.C. (1987). The value of language-maintenance efforts which are unlikely to succeed. *International Journal of the sociology of Language 68*, 57-61

Fennell, D. (1981). Can a shrinking linguistic minority be saved ? Lessons from the Irish experience. In E. Haugen, J.-D. McClure and D.S. Thomson (eds), *Minority languages today*. Edinburgh : Edinburgh University Press, 32-9

Garzon, S. (1992). The process of language death in a Mayan community in Southern Mexico. *International Journal of the sociology of Language 93,* 53-66

Haugen, E. (1966). Dialect, language, nation. *American anthropologist 68*, 922-935

Hill, J.H. (1978). Language death, language contact and language evolution. In S.A. Wurm W. McCormack (eds), *Approaches to languages*. The Hague : Mouton, 45-78

Jones, M.C. (2001). *Jersey Norman French*. The Philological Society, 34. Oxford: UK

Lodge, R.A. (1993). *French : from dialect to standard*. London and New york : Routledge.

Petyt, K.M. (1980). *The study of dialect*. London: André Deutsch

Pool, J. (1979). Language planning and identity planning. *International Journal of the sociology of Language 20,* 5-21

Richards, J.B. (1989). Language planning in Guatemala. *International Journal of the sociology of Language 77*, 93-115

Stich, D. (1998). *Parlons francoprovençal*. Paris : L'Harmattan

Tuaillon, G. (2001). *La littérature francoprovençale avant 1700*. Grenoble : Ellug

Wardhaugh, R. (1987). *Languages in competition*. Oxford : Blackwell